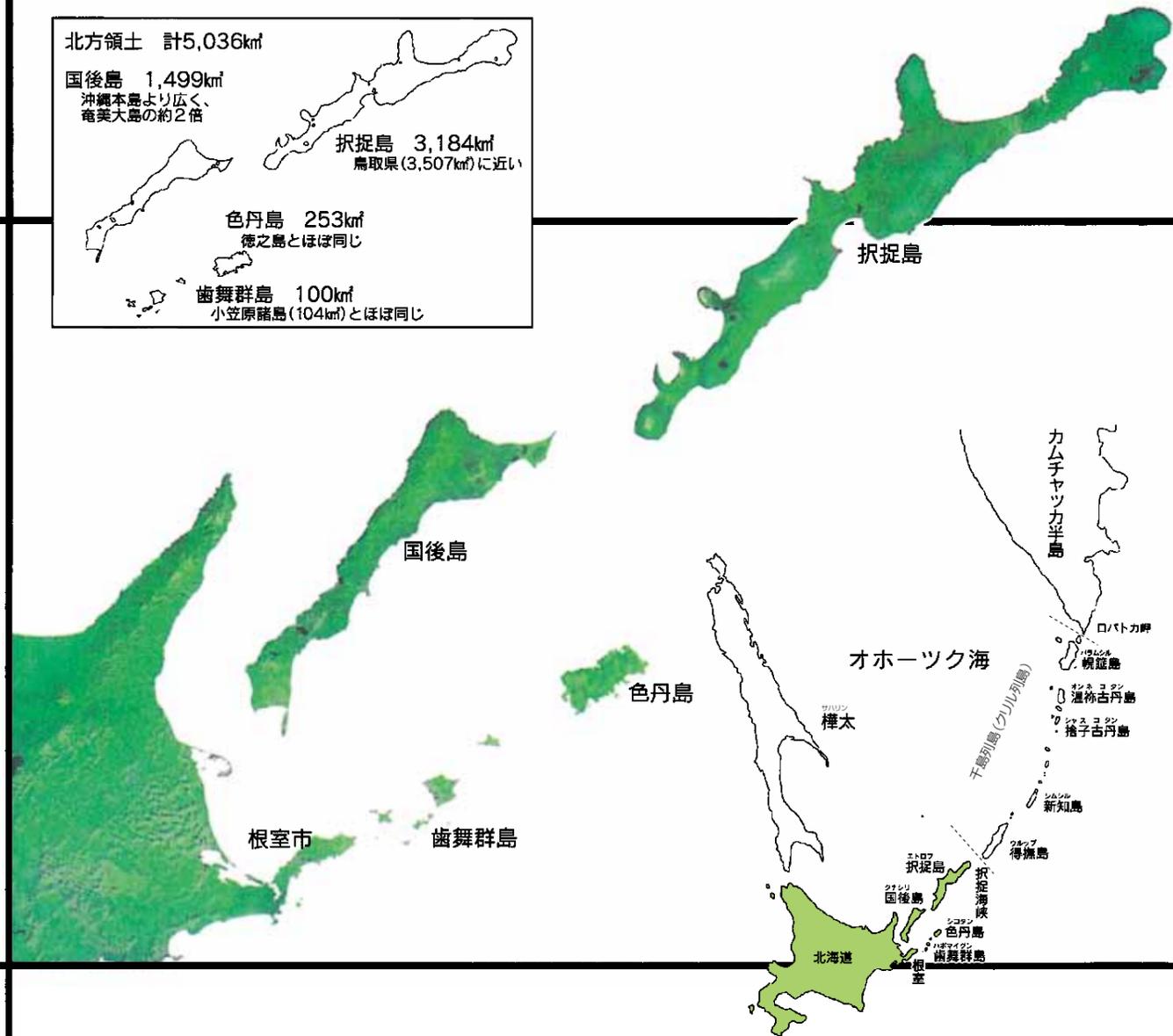
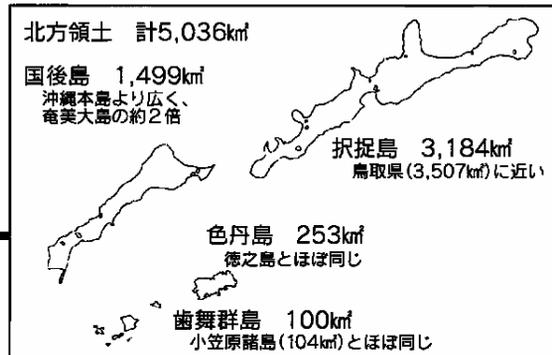


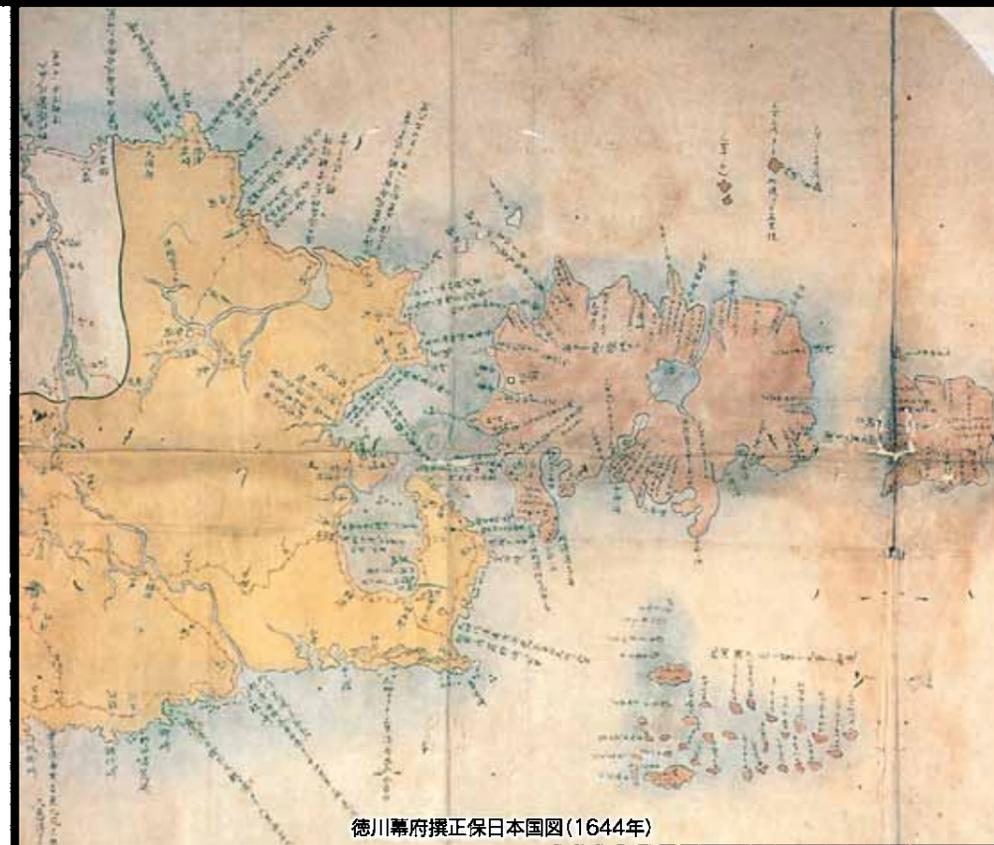
北方領土の早期返還を求めて

第24回「元島民の北方領土を語る会」集録

私たちが「北方領土」と呼ぶのは、
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島(多摩島、志発島、
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など)の四島です。



日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



『考えよう みんなで解決 北方領土』

(平成25年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)

主 催 / 公益社団法人 北方領土復帰期成同盟

も く じ

1	平成25年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱	2
2	平成25年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況	3
3	「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて	
	○ 北方領土返還要求運動について	北方領土復帰期成同盟 4
	【新潟県会場】	6
	○ 択捉島元島民	三 船 志代子
	【滋賀県会場】	11
	○ 水晶島元島民	吉 田 義 久
	○ 国後島元島民二世	白 崎 賢 哉
	【神奈川県会場】	19
	○ 択捉島元島民	櫻 井 和 子
	○ 志発島元島民二世	宮 脇 田鶴子
	【福島県会場】	26
	○ 択捉島元島民	佐 藤 徳 一
	○ 志発島元島民二世	神 林 美 砂

1 平成25年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

1956年、日ソ共同宣言が署名され、両国間に国交が再開されてから既に60年以上が経過した。この間、我が国は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、未だ不法に占拠された状態が続いている。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が当然我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

2 主 催

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

3 後 援

公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

4 開催時期

平成25年7月～平成25年12月

5 開催内容

(1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟 (10分)

(2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世 (20分)

北方領土元島民 (40分)

2 平成25年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開催団体	参加者 (人)	語り手 出身島	プロフィール
7月14日(日) 新潟県佐渡市 佐渡市連合婦人会	185	三船志代子 (75) 択捉島	昭和13年9月 択捉島薬取生まれ 昭和22年 強制送還 昭和32年 根室生産農協連勤務 平成13年 「四島(しま)とわたし」絵本コンクール最優秀賞
9月7日(土) 滋賀県近江八幡市 滋賀県地域女性団体連合会	40	吉田 義久 (76) 水晶島	職 業 行政書士、建築設計士 昭和12年8月 水晶島生まれ 昭和20年8月 終戦により本土へ引揚げ 昭和60年4月 千島歯舞諸島居住者連盟富山支部長に就任 昭和60年5月 千島歯舞諸島居住者連盟理事に就任 昭和60年6月 北方領土問題対策協会評議委員に就任
		白崎 賢哉 (58) 国後島(二世)	職 業 別海町役場職員 昭和30年1月 根室市生まれ 昭和54年5月 別海町役場奉職 現在に至る
11月7日(木) 神奈川県横浜市 神奈川県地域婦人団体連絡協議会	60	櫻井 和子 (82) 択捉島	昭和6年9月 択捉島留別村生まれ 昭和17年 函館に移住 昭和22年 家族が強制送還 平成13年 千島歯舞諸島居住者連盟功労賞受賞 平成24年 内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方担当)表彰受賞
		宮脇田鶴子 (66) 志発島(二世)	職 業 教室講師 昭和22年4月 中標津町生まれ 昭和44年4月 トヨタカラーラ鋸路(株)入社 昭和46年4月 根室生産農業協同組合連合会勤務 平成18年5月 財団法人中標津町文化スポーツ振興財団理事 平成20年3月 根室生産農業協同組合連合会退職
11月18日(月) 福島県会津若松市 会津若松市婦人団体連絡協議会	50	佐藤 徳一 (74) 択捉島	昭和14年4月 択捉島留別村生まれ 昭和22年8月 強制送還により引揚げ 昭和22年10月 函館に上陸
		神林 美砂 (52) 志発島(二世)	職 業 会社役員 昭和36年 根室市生まれ 昭和61年 東京たばこサービス(株)入社 平成11年 (有)ジンアドバタイジング設立

3 「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟

本日、神奈川県地域婦人団体連絡協議会の皆様にお集まり頂き、元島民の語る会を開催させて頂き、厚くお礼申しあげます。

また、松尾会長をはじめ、お集まりの皆様方には、日頃から北方領土返還要求運動にご理解、ご協力いただき、厚くお礼申しあげます。

北方四島は、父祖伝来の地として受け継いできもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない我が国固有の領土です。

その、北方四島が旧ソ連、現在のロシアの不法占拠の下におかれてから、今年で68年となります。政府においては、本年4月、安倍総理が内閣総理大臣として、10年振りにロシアへ公式訪問し、日露首脳会談を行ったのを契機とし、6月にイギリスの北アイルランド・ロックアーンで開催されましたG8サミットでの首脳会談など半年の間に4度の首脳会談を行うなど、北方領土問題の交渉を加速させるため、精力的に外交交渉を行っております。

また、先日はロシアのラブロフ外相が来日するなど、今後の外交交渉が進められる中で、今度こそ、北方領土問題の解決に向けての第一歩が印されることを期待し、また願っております。

さて北方領土問題は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が日ソ中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方四島を不法に占領したことが始

まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領を容認しましたが、北海道の北半分の占領は認めませんでした。アメリカが全クリル諸島に対する修正を認めなければ、アメリカの占領下に入り、沖縄と同じような対応となったかもしれません。

この不法占領に対し、昭和20年12月1日、当時の根室町長^{あんどういしすけ}安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことの出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、北方領土返還要求運動の始まりです。

根室から始まった返還要求運動は、札幌、函館と裾野を拡げ、北海道全域に拡大して行きました。その後、昭和30年代に入ってから、全国的な運動として根付いたのです。

現在は各都道府県に、北方領土返還要求運動を推進する組織として、県民会議が設置されており、様々な運動を展開しております。

領土問題は国家の主権に関わる基本的な問題です。

日本政府は「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、外交交渉を

続けてきております。

北方同盟では、関係機関、団体との連携のもと、積極的に返還要求運動に取り組み、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

しかし、北方領土が不法占拠されて68年と長い時間が過ぎ、返還要求運動の先頭に立ってきた運動関係者は高齢化しており、次代の返還要求運動を引き継ぐ後継者の育成が急務となっています。

北方同盟といたしましては、後継者の育成事業を推進するとともに、返還要求運動を粘り強く取り組み、北方領土問題を風化させぬよう取り組んで参ります。

最後に、皆さんにお願いがあります。北方領土問題は日本国民皆さんの問題です。捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところであり、住むべき所なのです。そのことを忘れないで下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなり、1日も早い故郷への帰郷を願っている元島民の方々の励みとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

【新潟県会場】

- 開催日時 平成25年7月14日(日) 10時00分～12時30分
- 開催場所 佐渡市両津文化会館
- 開催団体 佐渡市連合婦人会
- 参加者 185名

元島民の訴え



択捉島元島民 三 船 志代子 さん

皆様こんにちは！私は三船志代子と申します。私は今は、札幌に住んでおりますが、生まれたのは北方領土です。北方領土の中で一番北にあり、一番大きい島、択捉島の薬取村というところですよ。薬取村の薬取とは、アイヌ語で「大きい川のところ」という意味があるそうです。今日は、薬取村で人々はどんな暮らしをしていたのか。それから戦後、村にロシア人がやって来た時の様子。また、強制送還、四島から引き揚げる時の様子などをお話いたします。

薬取村には、今は行きたい時に何時でも行ける訳ではないのですが、3年か4年に一度、墓参または自由訪問に参加して行くことが出来ます。薬取に行くには、根室の港から船で行きます。一昼夜掛かります。翌日、ロシアのハンターに護られながら上陸しますが、村はすっかり自然に還っており、人は住んでおりません。代わりにヒグマの住処になっております。それでロシアのハンターさんに護ってもらうのです。

私たちが引き揚げてくる時、村には約500人の人が住んでおりました。今は、学校の門、

お寺の境内にある大きな松の木、神社の土台などが残っております。お墓は、小高い丘にあったのですが、このお墓から捨てられた墓石が一箇所に集められているのを見ますと、昔、人が住んでいたことが解ります。

島では、魚が沢山捕れたようです。世界の三大漁場の一つと言われておりましたから。村には薬取川という大きな川がありました。この川の色が変わる程、魚がのぼってきました。男の子は、自分で道具を造り魚を獲って遊んでおりました。村の多くの人々は、この川で働きました。魚が獲れる季節になると、多くの出稼ぎの人々もここで働きました。この時期、村の人口は倍以上に膨れ上がり、千人を超えることもあり賑わっていたようです。

冬が近づき、漁が終われば切り上げ。出稼ぎの人々は、それぞれの故郷に帰ります。村は静かになり、寂しくなります。しかし、村では青年団や子供まで村の主な人たちで、歌舞伎を上演したそうです。村人は、会場の公会堂に御馳走を持って集まり、楽しんだようです。村長さんは何時でも主役を務め、私の父は女形を務めていたようです。これらの様

子は、父の古いアルバムにありました。ですから、薬取村は小さい村でしたが、豊かな暮らしの様でした。

幼かった私が島で楽しかった事と言えば、やっぱり川や海で遊んだことです。綺麗な砂浜が続く浅い海には、小さいカレイの子が沢山いて砂の中に体を隠して、頭だけ出して目が光るのですぐに見つけることができます。これを、私たち子供は足で踏んだり、手拭いを広げてすくって遊びます。ところが、カレイの子は素早く砂を舞い上げ、逃げ回り私たち子供は中々捕まえることは出来ませんでした。街から少し離れた、トッカリモイという岩場に行くと花咲ガニがいっぱいいて、これを捕まえて遊ぶのもとても面白かったです。

皆様もご存じの事ですが、北方領土や択捉島について書かれた書物は沢山出版されております。これらの書物によりますと、北海道もそうですが北方領土には元々アイヌの人々が住んでおりました。ところが、1700年代後半から1800年代といえますから約200年前、ロシア人の南下により襲撃されたりトラブルが起きるようになったそうです。

そこで、当時の幕府の命により最上徳内、近藤重蔵、海の豪商といわれた高田屋嘉兵衛らによって択捉島に漁場が開設されております。17ヶ所開設されたそうです。

その時、信心深い高田屋嘉兵衛は各漁場にお地蔵様を一体ずつ安置し、豊漁を祈願したそうで、薬取もその内の一つだったそうです。ですから村には、その時のものと言われるお地蔵様がありました。お寺の境内にあったお堂の中にそのお地蔵様があり、亡くなった子供の着物を肩に掛けてもらい、何時でも花が供えられていました。薬取村には、北の外れに「カモイワッカ」という岬がありました。ここには、「大日本恵登呂府」と書かれた標柱が建てられていました。これは1798年。近藤重蔵が建立したそうです。

村の暮らしと言っても、65年以上も前の事ですからもちろん電気、水道、ガスはありま

せん。明かりは、石油ランプです。水は井戸もありましたが、街の中央にコンクリートで出来た大きな水槽の入った建物があり、山から桶で水が引かれていました。冷たくて美味しい水でした。それぞれの家庭には、大きな樽や水瓶がおいてあり、街の水槽から天秤棒で担いで運びました。

暖房は、薪ストーブです。ストーブの前には、大きな炉が切っておりオキを出して五徳を置き、鉄瓶などが掛けてありました。お湯は何時でも沸いており、暖かいお茶などは直ぐに飲めました。電話は郵便局、役場など村に何個かありました。街にはお店が一軒ありました。このお店は、現在のスーパーマーケットの様な存在で、何でも売っておりました。お米や味噌、醤油、酒類、衣料品、薬、その他日用雑貨など何でも売っておりました。

通信販売も行われていたようです。私の父は、東京銀座の「三越」や「高島屋」から買ったと話しておりました。子供の着などは、このお店で売っておりましたが、母の和服などは解いて自分で洗い張りをし染め直し、縫い直しなど今で言うリフォームをして着ていました。村には、ミシンを持っている婦人が一人おりました。このご婦人は、戦前戦後を通じ村人に大変喜ばれたそうです。終戦直後、学校に入学することになった子のために、ランドセルの代わりに丸帯を解いてリュックサックを縫ってプレゼントしてくれました。また、村にロシア人が来てからはワンピースなどを縫ってあげるなど、とても喜ばれたそうです。

冬になると、船の往来が出来なくなるので、冬に必要な生活物資は纏め買いをしていたようです。畑の野菜も芋、人参、大根、ごぼう、キャベツなど何でも採れました。他にきゅうり、なすび、豆類も採れたそうです。山菜などは、春早くからギョウジャニンニク、コジャク、ウド、蕨、今は高級食材の一つのユリ根など沢山ありました。さくらんぼ、フレップ、いちご、松の実なども美味しく食べました。

ロシア人が村にやって来た時のこととお話しいたします。当時、ロシア人のことをロスケと言っておりました。戦争は昭和20年8月15日に終わっておりましたが、三日後の18日からソ連軍は突然、一番北の島シムシム島への攻撃を開始し次々と島に上陸し、9月5日までに四島は全てソ連軍に占領されたそうです。薬取村にロスケがやって来たのは、9月中過ぎた頃と聞いております。私は幼かったので、詳しいことは判りませんが村人は「ロスケが来ると大変なことになる」ととても心配したそうです。

例えば強奪、特に女性に対する乱暴などが心配されたそうです。しかし、薬取では家探しや小さなトラブルはありましたが、大きな事件はありませんでした。でも、他所の部落では射殺事件などが起きておりました。太平洋側の単冠湾に面した年萌では、事件が起きておりました。真夜中、民家に銃を持ったロシア兵がやって来て、対応に出た男性が射殺されております。その民家は私の母の実家、射殺されたのは母の兄、私の叔父さんでした。

この叔父さんは、体が弱く兵隊にも行けず家にいました。その時、村の代表を通して抗議しましたが、何の音沙汰もなく引き揚げてきました。

私の家の前には、村役場があり人々の出入りはよくわかりました。しかし、窓を閉めて外を見てはいけないと言われました。暫くした頃、夕方なぜか外が騒がしいので静かに窓の隙間から見ると、ロシアの兵隊が踊っていました。1人がアコーディオンを弾き、1人または2人で代わる代わる楽しそうに踊っていました。今考えると、コザックダンスを踊っていたのでしょう。とても陽気な人々という印象でした。

まもなく、ロシア人の家族連れも村にやってきました。しかし住む家がありません。すでに大きな建物、駅通や旅館は没収されておりましたが、それでも足りません。私達日本人の家を半分にして、ロシア人と暮らすこと

になりました。私の家にもロシア人の家族が入りました。時々、日中女性が遊びに来てパンの焼き方などを母に教え、仲良く暮らしておりました。ロシア人が来てから、学校も半分にしました。そのため、学芸会など学校で出来ずお寺の本堂に舞台を造り、歌や踊り、劇などをしました。このお寺はとても立派なものでした。

強制送還で島から引き揚げる事になりました。その時の様子をお話しいたします。終戦から2年後の昭和22年8月下旬の事です。それまでの間、択捉島以外の国後島、色丹島、歯舞群島に住んでいた人々は、本土根室との距離が近かったので、ソ連軍の進駐を恐れ自分の持ち船や知人、友人の船で命懸けの脱出をしたそうです。実際、時化に遭い命を落とした人が多くいたそうです。

引き揚げの通達が出てから、慌しく荷物を纏め引き揚げる人々は岩山を越えた砂浜に集められました。ところが、引き揚げる事になった人は、村の住人の半分だけでした。どの様にして選ばれたかは判りません。残された人々は、更に1年間ロシア人と共同生活をし、翌昭和23年に引き揚げる事になります。引き揚げのとき、私の家族は父、母、4人の子供の6人でしたが、他に夫を亡くしたおばさんの家族8人も一緒でしたから、14人の長として30代の父は大変だったと思います。

引き揚げ船に乗るときは、私たち薬取の人たちが最初に乗船しました。薬取の海は、遠浅で大きな船は沖に停泊し、舳で乗り降りしなければなりません。この舳に荷物と一緒に乗せられた私は、生まれて初めて船に乗るので嬉しくなってしまう、澄んだ海の底を覗いてはしゃいでおりました。でも、不安そうな大人の顔、既に船酔いで嘔吐する人など色々でした。

乗せられた引き揚げ船は、ロシアの貨物船でした。それから、何日もかかって次々と島の引揚者を乗せました。船底から甲板まで人で人でいっぱいになりました。しかも、船の

中はととてもとても不衛生でした。蚤、虱、南京虫など、その他トイレの事、飲み水の事、食べ物の事など不潔で不自由なことがいっぱいでした。

私たちを乗せた引き揚げ船は、一番近い根室の港ではなく樺太に連れて行かれました。真岡港に着き、上陸させられました。宿舎となる女学校まで、延々と続く道をひたすら歩きました。大人も小人も老人も、小学3年生の私にとっても背中に大きなリュックサックを背負っているのも、とても辛いものでした。直ぐ下の妹は、小学1年生と一緒に歩きました。その下の妹は4歳で、父の背負った荷物の上に肩車。その下の妹は、未だ乳呑児で母が「オンブ」していました。そんな恰好で、他の人々も皆ただただ黙々と歩きました。宿舎になった学校は、まだ9月上旬というのに寒くて眠れない夜もありました。寒くて眠れないのでトイレに行きたくなります。しかしトイレが外で遠い所にありました。途中、ロシアの兵隊が銃を持って監視しているのです。とても恐かったです。

引き揚げの時、荷物も制限されました。1人30kgと聞いております。それで、その家の一番大切な物だけ持ちました。私は大きなリュックに「仏様」と子供の下着を持ちました。他の人々は、例えば着物でも振袖など良いものを沢山持ちました。しかし、これらの荷物は上陸した真岡で移動の時に、全て盗まれたそうです。荷造りの仕方でも中身がなんなのか、大事なものが入っている事が解ってしまった様です。途中で荷物検査があるのですが、この荷物検査で引っかかると全て没収されたようです。

私の父は、アルバム4冊を持ちました。その時、アルバムの様な品は没収されるなど良くない噂が流れていたそうです。そのため、村の引揚者でアルバムを持った人は、父の他に1人もいなかったそうです。この荷物検査を無事通過した父のアルバムは、その後大変活躍することになりました。戦後作られた写

真集の中の、薬取村の写真のほとんどは父のアルバムから提供されました。また、父の所に行けば家族の写真があると聞き、遠くから訪ねて来る人も大勢いました。このアルバムは、今のようにコピーのない時代で、あちこち剥がされボロボロになって実家に残されております。

ようやく、9月の中過ぎた頃、日本の引き揚げ船で函館港に入港しました。ところが、赤痢や麻疹などの伝染病が流行っており、上陸できませんでした。頭から首から背中、お腹まで息ができないほど真っ白にDDTをかけられながら、船の上で一週間位いました。その後、上陸しましたが、みんな栄養失調のような状態で多くの人々が亡くなりました。せつかく病院に入院できても、食べ物や良い薬も無く、亡くなる人が多く出ました。

私の村の村長さんの小学生だった娘さん二人も亡くなりました。10代のお兄さん二人で妹の亡骸を一体ずつ、背負って焼き場に行き火葬してもらったそうです。この時、入院していたおじいちゃんも亡くなりました。村長さんは、村人の半分を島に残してきたため、次の年に村人が全員無事に引き揚げて来るかを確認するまで、函館を動こうとしなかったそうです。村長さんは連合軍の占領下でもあり、公職追放令で公職にも就けず10代の息子さん二人のアルバイトだけの大変、厳しい生活をしたそうです。一緒に引き揚げた人々は、それぞれの親戚縁者を頼って、全国に旅立ってゆきました。

ちなみに、引き揚げの時一緒だったおばさんの家族は、無縁故ということでお役所が決めてくれた所に行きました。私達は、おばさん一家と別れ根室管内の別海町西春別という所に行きました。別海町と言えば、今は豊かな酪農地帯となっておりますが、当時は軍馬補充部があったところで、その従業員は新天地に旅立って行き、空いた官舎に私たちは住むことが出来ました。

戦後の食糧事情は、私たち引揚者ばかりで

なくみんなが貧しく、品不足でもあり手に入らないそんな時代でした。その頃、私は幼かったので少々寒かったり、お腹が空いたりしても親の加護の下幸せなものでした。

最後になりますが、皆様にご覧いただけます。私たち元島民は、先頭に立って四島返還運動を行って参りました。しかし結果は、皆様ご存じのとおりです。ようやく安倍総理大臣がロシア訪問を果たし、問題解決に向け一歩前進したかに見えますがとて難しい問題

です。

終戦当時約1万8千人いた島民も約1万人が亡くなり、残る私たち元島民の平均年齢は78歳を超えました。皆様、北方領土の問題は、私たち元島民だけの問題ではないのです。国民一人ひとり、みんなの問題です。どうぞ、これからの領土問題解決のため、本日ここにお集まりの皆様のお知恵とお力を戴きたくお願いして私のお話を終わります。



【滋賀県会場】

- 開催日時 平成25年9月7日(土) 10時00分～11時30分
- 開催場所 滋賀県婦人会館
- 開催団体 滋賀県地域女性団体連合会
- 参加者 40名

元島民の訴え



水晶島元島民 吉田義久さん

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、北方領土水晶島に居住し、現在富山県黒部市に住んでいる吉田です。今日は、滋賀県婦人会連合会にお招き下さいまして誠にありがとうございます。北方領土元島民として、当時の生活などを話す機会をいただきましたことを感謝いたします。

お話しに入る前に、お願いを申し上げます。お話を聞かねばならないことは、何分このように多勢の方々の前でお話することに大変不慣れですので、お聞き苦しい点が多々あろうかと存じますが、ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

まず、北方領土とは皆さんもご存知のとおり根室半島ノサップ岬よりわずか3.7kmしか離れていない貝殻島を含めた歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島なのです。私は、その歯舞諸島水晶島で昭和12年8月10日に生まれ、昭和20年8月末の終戦まで過ごしました。その間、島で生活した記憶をお話いたします。当時まだ9歳で、島での生活は本当に詳しくは覚えていませんが、断片的に記憶があり今は亡き両親から島での生活について聞

いた話しなどを交えてお話いたします。

私の住んでいた歯舞群島水晶島は、私達の祖先富山県人が開拓したといっても過言ではありません。富山県人は明治初期より、北海道下場所といわれた知床、根室地方に出稼ぎに出て生計を立てていました。それを基盤に北方の島々を苦勞に苦勞を重ね開拓した歴史があります。

北方の島々は、日本海流（暖流）とオホーツク海流（寒流）と交わり、世界三大漁場といわれるほどの漁業資源の豊富な地域で、カニ、鮭、鱒、ニシン、コンブなど豊富な漁業資源に恵まれた島々なのです。その島々に定住し、長年に亘り血と汗の結晶で築きまた北海の荒波と闘い命を懸けて開拓しました。

この四つの島々が日本固有の北方領土なのです。私達北方領土元島民にとれば、それぞれの島にそれぞれの思い出があります。楽しかったこと、苦しかったこと、それぞれの思い出が戦後68年経過した現在でも、胸の奥に深く残り、くっきりと焼き付いています。

北方の島々は、大変厳しい気候と想像されると思いますが、私の住んでいた水晶島も冬

になれば一面雪と氷に覆われて厳しい時期もありましたが、四季を通じて美しい自然もありました。春5月ともなれば、ハマナス、スズラン、マーガレット、黒ユリなどの花々が草原一面に咲き乱れ、小鳥が甲高くさえずります。その時期になると、昆布漁が最盛期に入り、子供の頃は学校へ行く前に昆布干しを手伝ったり、干場の草を摘んだり子供には子供なりの仕事がありました。

私の家族は、毎年この島を本拠地に昆布漁を行い、沿岸漁業を営み生活基盤を築いてきたのであります。生活も安定し、さてこれから仕事も軌道に乗って事業を拡大しようとしていた矢先の昭和20年8月15日、大変厳しい世界大戦も終戦となり、私達島民はホッと一息をつき、仕事も落ち着いて出来ると思っていた時、9月1日よりソ連軍が島へ上陸してきました。

日本有史以来、どこの国にも支配されたことのない日本固有のこの北方の島、齒舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方の島々が数日のうちに占拠されてしまいました。島民は、外国軍隊の上陸で大変恐怖を感じ不安でした。私達元島民は、一夜のうちに故郷が奪われて島を追われてきたのです。全財産を失い

命からがら身一つで根室に追われてきた島民は住宅難、食糧難、就職難に見舞われ、筆舌につくせぬ苦労がありました。このように当時の記憶をたぐってお話いたしますれば、恐ろしい記憶や懐かしい故郷の様子がありありと浮かんでまいります。皆様一人一人に、懐かしい故郷の思い出がありますように、私にはその頃の島の様子の一つ一つが走馬灯のように思い出されます。

今ここに、戦後68年も経過しましたが、未だ故郷の四島はロシアに不法占拠されたまま返還されません。我々元島民は引揚げ以来、今日まで故郷を偲び四島の返還を叫び返還運動に力を尽くしてまいりました。終戦以来、各地で北方領土返還要求運動が展開されてまいりました。今日も皆さん多勢ご参加をいただき心より感謝申し上げます。私達元島民は、先人が流した血と汗を決して忘れず、無駄にせぬよう早期返還を粘り強く叫び続けてまいりる決意でございます。最後になりましたが、本日ご参集の皆様のご健勝とご多幸をご祈念いたし、尚一層北方領土返還にご尽力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。ありがとうございました。



元島民二世の訴え



国後島元島民二世 白崎賢哉さん

皆さんこんにちは。千島歯舞諸島居住者連盟別海支部・青年部長の白崎賢哉です。

これは本当の話なんです。一昨年の3月、息子の進学先が横浜に決まりアパートを見つけに不動産屋に行って、部屋も手頃なのが見つかり書類に必要事項を記入して渡したら、『北海道の野付郡別海町ってどの辺にあるんですか〜？』と聞かれ、『択捉島とか国後島知ってますか？ソッチの方ですよ』って、答えましたら『あ、北方領土ですか〜！』と言われました。別海町は北方領土でないですけど、大体の位置を解ってもらいたかったのですが、北方領土は意外と知られてるんだなと思いました。

父、母と一番上の兄が国後島からの引揚者で元島民一世で、私は、島を奪われて10年目の1955年、昭和30年に根室で生まれ、元島民二世になります。根室管内の千島歯舞諸島居住者連盟に入ると、二世は皆青年と云う立場になって、58歳の私としてはものすごく恥ずかしいのですが、自己紹介では『青年』の名前を使わせてもらっています。

終戦当時17,291人いた一世の人達も、現在1万人以上の方々が物故者となり、平均年齢も79歳になろうとしています。北方領土返還要求運動の主力は、もう私たち二世の時代になっています。

私が生まれてから18歳まで住んでいた所は、酪農と林業で成り立っている小さな集落で、根室市街から西に約20km、根室半島のやや付け根辺りに位置し南に太平洋、北にオ

ホーツクとどちらの海も見えるところです。今の時期はサンマ漁が始まっているのですが、太平洋には漁り火がネオンのようにキラキラ輝き、大きな町が出来たように見えます。

それとは対照的に、オホーツクはそのような明るさは無く暗い海なんです。突然何本ものサーチライトが海に空に激しく交差することがあり、怖い感じを受けました。その様な翌朝には、必ずテレビで、ラジオのニュースで『昨夜、根室管内の漁船がソ連の国境警備隊に拿捕されました。今年に入って、すでに○隻目です。』と放送されてました。

2011年に調べた数字ですが1946年、昭和21年4月に第1号の拿捕があり、これまでに1,339隻、9,489人が拿捕され、拿捕の際、行方不明になったり抑留中に自殺したりして31人の方が戻ってきていません。そして、船もロシアに没収され返って来ません。漁師にとって、船は命の次に大事な物。家族を守る大切な財産です。

私の両親と兄は国後島の出身なので、国後島の概要を、お話します。国後島には南側半分を泊村、北側半分を留夜別村の二つの村がありました。国後は、全長122^{キロ}・幅6^{キロ}から30^{キロ}・面積1,499平方キロ。オホーツク海側の海岸は急傾斜の断崖絶壁に対し、太平洋側は比較的傾斜が緩く平坦地も多く、海岸線は出入りがあり天然の良港で豊かな漁場になっていました。このため、多くの村は太平洋側に集中し村人は漁業に従事したり、魚介類の加工工場で働いたりしていました。

また、国後は、利用価値の高いエゾマツ・トドマツなどの針葉樹の森林地帯が広がっており、漁業が閑散期の11月から4月位まで島の人達は木材の切出作業や、製材工場の作業員として働き、経済的に恵まれた豊かな生活を送っていました。

当時の島での交通手段は馬でした、牧畜業として『農耕馬や道産子』を育成し、軍馬としても北海道や本州に供給していました。また、牛も肉用牛として飼われ本州方面に出荷され、牛乳を島民に提供されていたそうです。

食生活ですが、肉類は熊の肉や鯨、トド、鴨の肉を大変なご馳走として食べていましたが、なかなか手に入れられず海鳥の肉や卵を取って食べていたそうです。もちろん魚介類は安く簡単に手に入れることができました。天然のホタテ貝、ウニは採り放題、蟹はタラバガニだけを獲り、花咲蟹などは捨てていたそうです。

野菜は北海道と同じ物が採れました。春になれば、蒔、こごみ、わらび、ギョウジャニンニク等の山菜が採れ、米、味噌、醤油以外は自給自足の食生活で暮らすことができ、店は品揃えも豊富で、日常生活に不便をすることは有りませんでした。

島には温泉が多く、砂浜を掘るとお湯が湧きだし、村人達は日常生活に利用していたそうです。よく知られている温泉だけでも13カ所あり、旅人が楽しんだり島民の湯治の場として利用されていたといえます。また、オホーツク側の古丹消と言うところでは地熱を利用して葡萄やスイカも栽培していたそうです。

昭和20年8月15日の人口データによると、四島には3,124世帯17,291人住んでおり、そのうち国後島には、四島の人口の43%に当たる1,327世帯・7,364人住んでいたそうです。

現在北方四島には約17,000人が住み、国後島はロシア人が6,900人住みその80%の人が漁業に従事しており、専業農家はごくわずかにいるだけです。牛や豚も副的に飼われています。牛は市街地に放牧されていて、ゴミ

箱に頭を突っ込んで生ゴミを漁っている姿をよく目にします。ビザなしで行った日本人は野良牛と呼んでいます。

島には舗装道路が最近整備されてきていますが、未だにほとんどの道路は凸凹の砂利道です。車はスピードを出して走りますので、土埃が舞い上がり後ろを走る車は前が見えなくなるので、交通事故が頻繁に起こります。

車は、日本の中古が多く、乗用車は道路事情もあって四輪駆動車がほとんどです。トラックには、日本語で商店の名前や建設会社の名前が書かれたまま走っています。それがカッコ良くてステータスなんだそうです。

住宅は、2階建ての木造やブロック造りの集合住宅がほとんどで、ペンキは塗られていますが、車が立ち上げる土埃で全部灰色に見えました。最近では、市街地の舗装道路も整備されてきているので色のある街になってきています。家の中の壁紙は、自分好みに装飾して綺麗にしています。

水道は整備されていて、水源地の水質は良いそうですが、水道管を通ってくると水質が悪くなり慣れない日本人が飲むと下痢したりするそうです。トイレは水洗ですが、流れが悪いので固形物が流れません。それでも、最近では少数ですがシャワートイレやジャグジーの風呂をつけているところもあります。

商店には、ロシア製はもちろんですが日本製、韓国製、中国製などの海外からの商品も沢山置いています。特に、インスタント食品は韓国製が多く目立ちます。中国製の食べ物は買わないようにしているそうです。

私の父は、大正6年に国後島の留夜別村植内で生まれました。祖父は、植内尋常小学校の校長をしていましたが、父が2歳半の時亡くなり昭和元年9才で根室に移り住んだので、島の思い出は少ないのですが、海や山で遊んだことや、裸馬に乗って遊んでいたことを懐かしく語っていました。

母は、3人姉妹の長女として、大正11年11月1日に国後島の泊村古釜布で生まれまし

た。祖父は林業会社に勤め、木材の切出し作業の頭領をしており、祖母は缶詰工場で出面取り、今で言うパートをしていました。

古釜布は、四島の中で一番大きな活気のある街で、朝は早くから通りを歩く人の足音や下駄の音がカラコロカラコロと響き、港からは、焼玉エンジンを積んだ漁船がポンポン…と響き、お祭りの太鼓のような心弾むような音で一日が始まり、夜は遅くまで人の往来があり、男、女達の笑い声が響く。とにかく一日が、賑やかに忙しく過ぎていく街だったそうです。

普段は、葉っ葉服やもんぺ姿の男、女達もお祭りやお盆などには、当時の言葉で『ハイカラな服を着て、良い振り』で旅芸人の踊りや三味線、無声映画、そして青年団の田舎芝居を楽しんでいました。

古釜布の娘の大半がそうであるように、母も古釜布にあった国後尋常高等小学校を卒業してから、魚の加工場や製材工場で働き、料理、裁縫、行儀を身に付けるため習い事もしていました。娘盛りを古釜布で過ごした母は、昭和18年、21才で父の住む根室に嫁ぎ、翌々年の昭和20年3月には長男が生まれましたが、父は3度目の召集で旭川に出征しているところでした。

8月15日に終戦を迎えましたが、父は残務整理のため旭川から復員の見通しが立ってなかったため、古釜布の実家に長男を見せると、祖母が入院していたのでその看病のため里帰りをしたのが、昭和20年8月28日でありました。

この8月28日は、満州を制圧し樺太の北緯50度以南の日本領を占拠したソ連の第一極東軍が択捉島に上陸した日です。当時、日本は占守島から得蕪島までソ連兵が来ている事は解っていたそうですが、択捉以南の島にはアメリカ軍が進駐してくるものと思っていたそうで、ソ連軍が上陸してきたときにはアメリカの国旗を半紙に書いて出迎えた所もあったそうです。

9月1日の朝、古釜布の湾に灰色の軍艦が現れ、偵察機が旋回しソ連兵が上陸して来ました。立派な軍服を着た者もいましたが、汚れたボロボロの軍服や作業服を着たもの、日本軍の軍服を着た者など様々な服装をした兵隊達でした。女性の兵隊もおり、女性の兵隊は綺麗な軍服だったそうです。島の人達は欧米人を見るのは始めてで、話す言葉は、英語なのかロシア語なのか区別がつかないのです。

ソ連軍は通訳を介して『アメリカ軍は来てるか？アメリカ軍は島に上陸してないか？』と聞きながら、自動小銃を構えビクビクしながら上陸してきました。

国後島は9月4日までにソ連軍に完全に制圧され、古釜布で一番大きな旅館はソ連軍の本部に接収されました。一般の民家にも自動小銃を携え、戸棚、箆筒、押入れ、物置などを捜査し、武器を探すついでに着物や貴金属・日用品等を次々と略奪していきました。母の実家も縫い針、バリカン、マッチ等を持ち去られたそうです。

島の若い女性たちは、髪を短くしたり顔に墨を塗ったりして山に隠れて身の安全を図りました。接収された旅館に近い一般住宅も半分には仕切られ、母の実家もソ連兵が住み込みました。

当時の日本人男性の平均的身長は、男性で155センチ、女性で150センチぐらい。仕切られているとはいえ、一緒に住むロシア人は日本人よりはるかに大きい男達、毛深く、彫の深い、厳つい顔、何処を見ているのか判らない青い目、初めて聞く言葉、しかもヨレヨレの軍服、恐ろしかったそうです。

ソ連軍の監視は厳しく、自由を奪い外出することも許されない状況が続きました。言葉の通じないソ連兵に、銃を突きつけられての生活に我慢ならない人は、島からの脱出を謀る人が現れました。霧の深い夜とか嵐の夜、濡れたムシロを焼玉エンジンに被せ、音を消して脱出を謀るのですが、脱出を発見され、嵐で船が転覆し亡くなる者、根室を目前にし

て波に呑まれる人も大勢いました。国後の浜や根室の浜には何十体もの遺体が打ちあがることもありました。

このような状況の中でも、やっと、島から抜け出したにもかかわらず、また島に戻り、再び抜け出した人達もいました。この人達が島の状況を根室に伝え、根室の人達に脱出の手引きをさせる役目を担ったのです。

ソ連軍が船と住民の監視を更に厳しくすると、脱出することも出来なくなり、人々は島に留まるしかなくなりました。

根室に近い歯舞群島の人達は逃げる事が出来ましたが、択捉島の人達は北海道まで遠いため逃げることは出来ず島に残りました。島の人達はソ連兵の駐留も永くなく、何ヶ月かすると島に戻れると思っていた人たちが相当多く居たそうです。

翌年の春には、ロシアの民間人が島に上陸し、兵隊たちと同じように日本人の家を仕切って住んだり脱出した日本人の家に住んだり、物置に住んだりしました。上陸した民間人の多くは、家財道具の持合せが無く、食べ物も儘ならない者や、着る物にも事欠き、麻袋を腰に巻き寒さをしのいでいる女性もいました。異国からの侵略者だといっても、困っている者を見捨てる訳にもいかず、食料や衣服・日用品を分け与えたりして助けました。

だんだんと、ソ連兵の略奪行為も無くなり、日本人の気質・生活・風俗・習慣に興味を持ち、そして日本人の勤勉さや道徳観に感心を持つロシア兵士や民間人も現れ始めました。

日本人も、ロシア人を観察し、歌とダンスが好きで、陽気な、人懐っこい人達であることが判りました。日が経つにつれ、言葉も何となく通じ合うようになり、子どもの誕生日や日本、ロシアのお祭りなどの節目の日には、それぞれの家庭に呼んだり呼ばれたり。晩御飯のおかずをあげたり貰ったり。病気になった時は、薬を都合しあったり近所付き合いの関係が出来てきたのです。

朝、台所で朝食の支度をしていると、兵隊

が外から窓を叩いてマダム、ブウマーガ・ダイチェ・パジャールスタ(マダム紙下さい)と言うだそうです、雑紙をやるとポケットから刻みタバコを出して器用に巻いて、美味しそうにタバコを吸うんだそうです。そしてパジャールスタと言って帰っていくそうです。その様にして親しくなったロシア人から、民間人の中にもKGBのスパイが居るから気をつけろ。スターリンの悪口を言うな。見つかったらチョルマン(監獄)に入れられる。と忠告してくれるのだそうです。

3年が経ち、ロシア人との生活も我慢や辛抱ばかりでなく、楽しかったことも少なからずありました。子供達も、日本語とロシア語を使い分けて仲良く遊んでいたそうです。

ソ連政府は、昭和22年から日本人の強制送還を初め、母達は昭和23年9月上旬、(立春から数えて210日辺りで)台風の季節に強制送還されることになりました。親しくしていたロシア人は、母のところに来て『日本には食べ物も無いそう、帰るな。せめて、子供だけでも置いていけ。』と言い、涙を流し別れを惜しんでくれましたそうです。この人達も、ソ連政府の命令によって強制的に故郷を追われ、この島に移住して来た人達で、故郷を追い出さる母達の気持ちを充分解ってくれていたそうです。

母達は米、釜、布団を背負い、舢舨で沖に止まっているロシアの2万トン近い貨物船に向かい、クレーンから吊られたモッコに荷物を置きその上に7~8人が乗って乗船したのですが、モッコが吊り上げられるとモッコの網目から手足が飛び出たりして、身動きできない状態のまま建物の4階ぐらいまで引上げられ、下を見れば大海原で白波が船体にぶつかり、モッコはユラユラと揺れ乳呑児や子供達は息苦しいのとその恐怖で泣叫び、そして甲板に軟着陸するかと思いきや、2mくらい上からドスンと落とされ、骨折や捻挫をした者もいました。母は、島を追出される悔しさこの恐怖と、痛さと日本人を人間扱いしな

いことにロシア人を憎く思い、悔しくて大声で泣き叫んだそうです。

船は、根室に向かうのかと思いましたが、樺太に向かって一週間程乗船していたようです。折りしも台風が近づいて揺れがひどく、仮設のトイレから漏れた糞尿が船内に漂い船の中の衛生環境は劣悪な状態で、大抵の人は船酔いになり吐いた物が更に悪臭を放つ、そんな状況の中で食事も摂れず亡くなる人も出てきました。亡くなった人は、水葬に伏されるのですが、何のセレモニーも無く船上から海に落とされるのです。

収容先は、樺太の真岡女子中学校の校舎。収容されている人が多いため、母達は1ヶ月程戸外での生活を余儀なくされました。9月中旬とは言え、真岡は北緯47度で秋の中頃です。昼は暖かいのですが、夜から朝方にかけて冷え込むので女学校の校舎の板を剥がして焚き火をして暖をとりました。日本人が順次送還され、校舎が空いてくると校舎の中で生活できたのですが、壁が所々無くなっていたのでやはり寒さは同じとゆうか冬に向かってさらに厳しくなっていました。

島を出る時に持ってきた米はすぐに底を尽き、配給されるコーリャンのお粥と、ニシンの塩漬けが配給されるのですが、寒さと栄養失調で亡くなる人が毎日のようにいました。また、地面に溝を深く掘って板を渡しただけの、仕切りの無いトイレに落ちて死ぬ子供も多くいて、毎日が死と隣り合わせの悲惨な日々でした。そこで2ヶ月位生活し、やっと日本に帰る順番が来ました。

真岡から函館の航路は、冬が間近で波が高く荒れ模様だったのですが、真岡の生き地獄から脱け出せる嬉しさで、苦しかった記憶は無いと言っていました。真岡から函館に向かう時の話ですが、乗船待合所で若いお母さんが赤ちゃんにオッパイを与えていたのですが、栄養失調が原因で赤ちゃんが亡くなりました。死んだ赤ちゃんは船に乗せられませんが、そのお母さんは何事も無かった様に今亡

くなった子に毛糸の帽子を被せオンブし、その上から『ネンネコ半纏』を羽織り、函館に着くまで背中から降ろすこともなく、寝ないで函館に運んだお母さんがいました。船から下り、両手で赤ちゃんを抱いて何時間も泣いていたので周りの人達も死んでいることに気づいたそうです。

このような体験をして、私の母、お兄ちゃん、爺ちゃん、婆ちゃん、二人の叔母ちゃんは故郷の国後を追われ函館に着きました。そして母の話はいつも、シラミ退治のため、頭の上から爪先まで、パンツの中までアメリカ製の殺虫剤DDTをかけられ、全身真っ白くなって終わります。

この母も今年92歳になり、記憶力は大分弱ってきていますが、島での生活や出来事を語るときは昔と同じ内容で話してくれます。強烈な体験として残っているようです。このような話を母から聞いて育った私ですが、オホーツクの海に怪しいサーチライトが交差し何やら怖い感じが受けても、幼いころから怖いもの見たさの好奇心だけが芽生えていました。

平成7年、ビザなし交流で国後島に行きました。日本の領土とか、父母の故郷と言うことは頭にはなく、物見遊山で見ると聞くもの食べるもの、その全てが珍しく新鮮に感じウオッカもとても美味しく飲むことができました。

しかし、港には沈船が何隻も放置され、廃油と魚の加工場から出る未処理の排水の匂いが漂っており、街並みは色の無い灰色の住宅が建ち並び、建設途中の住宅も資材が大陸から届かないとの事で、工事の再開も儘ならない状態。道路は車の腹がつかかかる位とんでもなく凸凹、車はそれを避けて右に左にと蛇行しながら走って行く。このような状況の中でロシア人は生活していました。

翌年に、74歳になった母を連れ行きました。強制送還から48年目の帰郷、砂浜や川を指差して『あそこで遊んだ』とか、遠足で来

たとか教えてくれました。川原で、日本人の使っていた三平皿の破片を見つけてはしゃいだり、知り合いの墓石が見つかるとう手を合わせ、自分の家の跡地ではボーッと立ちつくしていました。ホームステイ先では、抑留時代に覚えた下手なロシア語で談笑し楽しんでいるようでした。

人には何時でも帰れる故郷が必要なんだと、母を見てつくづく思った次第です。私は、国後には何回か行っていますが、段々と母父の故郷が自分の故郷のように思えてきました。

領土問題は存在しないと言い続けていたソ連は、ソ連社会の体制崩壊の危機に陥ると、

日露間に領土問題は存在するとゴルバチョフが言いました。新生ロシアになって、エリツインは経済協力が欲しくて2000年までに解決しようと言いました。そして今、エネルギー大国になったロシアは、北方領土は戦争の戦利品、返す義理がないとプーチンは言いながら、北方領土をちらつかせ日本の技術と経済を誘導しようとしている。それはロシアとして当然の態度だと思います。

私たち大人は、この日本を未来を担う子供たちに引き継いで行かなければ成らないと思います。



【神奈川県会場】

- 開催日時 平成25年11月7日(木) 10時00分～11時30分
- 開催場所 神奈川県婦人会館
- 開催団体 神奈川県地域婦人団体連絡協議会
- 参加者 60名

元島民の訴え



択捉島元島民 櫻井和子さん

皆さん、こんにちは。私は函館から参りました櫻井と申します。私は択捉島で生まれ、小学5年生まで暮らしていました。今日は皆さんに、北方領土について話をしたいと思います。

皆さん、北方領土はどんなところか良くご存じかと思います。北方領土は、北海道の東北の海上に浮かぶ択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の4つの島々からなりたっており、北方四島とも言います。

北方領土は我が国固有の領土なのです。固有とは、他から与えられたものではなく、元からあるものという意味なのです。歯舞群島の貝殻島と根室の納沙布岬との距離は、わずか3.7キロしか離れていないのです。

歴史上からみましても、1644年ですから今から約370年前になりますが、江戸幕府が正保御国繪図を作成した時も、択捉島、国後島と我が国の領土として書かれており、また江戸幕府が蝦夷地調査隊を派遣して、択捉島の岬に大日本恵登呂府と書いた標柱を立て、日本の領土として証明しています。また、松前藩が北方領土警備のために統治にあたってい

るのです。北方領土は、私達の祖先が厳しい環境の中で心血を注ぎ開拓してきた地なのです。1855年、安政元年には日露通好条約が結ばれ択捉島以南は北方領土、ウルップ島以北はロシア領とはっきり決められました。

北方領土には、たくさんの動物が住んでいました。オットセイ、トド、アザラシ、北キツネ、エゾウサギ、エゾテンなど。また森林資源にも恵まれ、ヒグマもたくさん住んでいました。珍しい鳥、エトピリカをはじめウトウ、ハヤブサ、ちどりなども住んでいました。

北方四島の海は、暖流と寒流がぶつかっているため、世界三大漁場の一つである千島漁場がありました。鮭、鱒はもとより、タラバガニ、花咲ガニ、鱈、ウニ、ホッキ貝、ホタテ貝、エビ、昆布、のりと水産資源に恵まれ鯨も捕れました。施設としても、捕鯨場があり缶詰工場があり、さけ・ます孵化場があり、当時は遠く函館、青森、秋田などからたくさんのお出稼ぎの人達が来ており、村の人口の2倍、3倍になりました。私は子供心にも、この土地ではどんな仕事もあり、一生食べて行ける所だと思いました。

私は択捉島で生まれ、小学5年生まで暮らしていたので当時の思い出話をしたいと思います。

小学校は1年生から6年生まで44人しかおらず、教室は1つだけでした。机の並べ方で分けられ、先生は校長先生1人で、用務員兼用です。右見て1年生、左見て2年生という忙しさで、1日に1時間しか授業は受けられず後は全て自習でした。私はその先生の姿を見て、将来必ず教師の資格を取って必ず島に帰り先生のお手伝いをする決心を持って、5年生で島を後にしたのですが、その夢はついに果たせませんでした。

思い出としては、村の小学校の運動会に参加したことです。4年生以上で3里半(14km)をお弁当を持ち、リュックを背負い一列に並んで一生懸命歩きました。3回くらい参加して、また同じ道のりを3時間余り掛けて帰ってくるのです。途中、熊が出るので4人くらいの父兄が熊よけのラッパを吹いて、馬で私達を守ってくれました。その中に父の姿を見て、嬉しく思いました。

村の中心にあった栈橋でよく釣りもしました。大きな色鮮やかなアブラコもよく釣れました。また海は寒流で泳げないので、沼や川で泳ぎを覚えました。学校の周りは松林で、この辺りの松かさとは違い大きさが10センチくらいの大きさと、松かさを剥くとお米の2倍くらいの大きさの白い実がとても美味しく、休み時間などに皆で取って食べたものです。私の村には捕鯨場があり、捕鯨船が鯨が捕れると長い汽笛を3回づつ鳴らして、港に帰ってくるのです。それを聞いて、皆競い合って10分ばかり走って解剖を見に行くのです。ウインチの鉄のロープで鯨が斜めになっている解剖場に引き揚げられると、すぐさま長刀のような50ランチ位の繪の長い道具で解剖が始まり、白い表面の油のすぐ下の肉、最高に美味しいところを20cm角に切り、荒縄で穴をあけて縛って私達にくれるのです。「持って帰って食べれ」というあの言葉。今でもはっ

きり覚えています。霜降りの美味しいお肉でした。夜でも夜中でもすぐに解剖が始まり、夜は白い油の部分で30~50cmくらいに切ったのを松明の中に投げ入れて、バリバリという音を立てて解剖する人達の手元を照らしていました。

年に2~3回映画も見る事ができました。小学校で上映されるのです。その帰り、薄氷が張った海面に月の光が映えて、その水面すれすれにチチ、チチと千鳥が鳴き飛んでいく様子は、素晴らしい光景でした。

電気も水道もガスもなく、現代の皆さんから見たら何と不自由な、とお思いでしょうが、島の人達は何の不自由さも感じないで、皆仲良く助け合い平和に暮らしていました。

1941年12月、日本は世界を相手に戦争に突入したのです。これが第2次世界大戦の始まりです。その約1ヶ月前の出来事でした。私の家は単冠湾(ひとかつぶわん)と言う海で、朝起きると5隻6隻と湾の中に軍艦が入港し、ついには40隻ほど合しました。かなり深い海だったと思います。軍艦の後方で日本の海軍さんがセーラー服姿で帽子のリボンに風をヒラヒラなびかせて、手旗信号を送っておりました。

夜は夜で、サーチライトの青白い光を何艘もの軍艦から空に向かって放たれ、それが空高く交差してまるで不夜城のような光景で、ランプの灯より知らない私達は驚きで眺めてました。出航の時も、朝起きてみると5隻6隻といなくなり、遂に1隻もいなくなりました。後から聞いた話ですが、ここから真珠湾に向かったそうです。

最初の頃は戦果を上げ、占領地等のニュースを聞く度に祝いの提灯行列もしました。段々敗戦の色も濃くなり、1945年8月アメリカは広島と長崎に原子爆弾の投下し、日本は無条件降伏という形で負けました。そのわずか6日前の8月9日、ロシアが日本に参戦したのです。原子爆弾の投下などで、日本に勝ち目はないと予測しての手段だと思います。

条約の効力があるのに一方的に北方領土を占拠したのです。

終戦当時は私は居なかったのですが、家族から話を聞きますとアメリカとの戦争に負けたのだから、進駐してきたのはアメリカ軍人だと島の人達は思っていたのに、それが靴も穴だらけ、服もボロボロのロシア兵でびっくりしていると、自由で威嚇しながら入ってきたそうです。

私の家は駅通と郵便局をしていたので、一番先に郵便局の通信施設を破壊し、旅館の方も土足で上がり、私の家族は全て前方の物置に入れられたそうです。島の交通機関は全て馬で、50頭余りいた馬も全て没収されてしまいました。

私の祖父は、明治28年生まれ鹿兒島県人ですが、釧路の警備隊から千島に渡り50年余り厳しい環境の中で、心血を注ぎ開拓に命を掛けて来たのに、どれだけ無念だった事かと心が痛みます。ロシア人の兵隊の家族達が私の家に住み、私達家族は物置小屋での生活が1年8ヶ月にも及びました。ロシア人は日本の着物が好きで、パンや野菜などを物々交換して暮らしていました。

引き揚げの時も急に船に乗れと言う事で、日用品などを置いて行かせるのが目的だったようです。島にも暁部隊という名の軍隊が入っており、どこかへ連れて行かれるという情報が入ったらしく、私の両親に「もし内地に帰れたら頼む」と何人かから手紙と写真を受け取りました。今はステンボルのようですが、昔はマホービンという大きめの水筒で中がガラスで出来ており、その周りが空間になっていたので、母はその大切なものをその空間に詰め込んで、見つけられずに持ち帰る事が出来ました。

終戦の1ヶ月前、7月14日と15日、函館空襲があり、島の両親が心配して「無事か」との電報が来たのですが、内地から島への通信は全く受け入れてもらえず、本局から何時も泣いて帰って来ました。

家族が皆引き揚げてきて、函館港に入り進駐軍が一番先に私の事を聞いたらしく、進駐軍が高校まで訪ねてきて、私の在席を確かめて行ったそうです。私はちょうどシベリアの引き揚げが始まっていたので、父だけシベリアに連れて行かれ引き揚げてきたと思っていました。恐る恐る進駐軍を訪ねると、家族全員が引き揚げてきた事を知り、引き揚げ船が岸壁に接岸している所に行き、5年ぶりに家族全員の姿に接したのは、嬉しく忘れられません。今日からもう1人ではないのだという勇気が湧いてきました。

今までロシア外相が訪日したり、1988年ゴルバチョフ大統領が日本を訪れたり、平成9年にはエリツイン大統領が来日し、その都度領土問題の解決に向けて話し合いが続けられています。日本からもその当時の総理大臣がロシアを訪れ、その都度領土問題が話し合われていますが、一向に解決の道は見いだせません。一昨年は当時のメドヴェージェフ大統領が北方領土を訪れ、資金面でも援助すると言ひ、返還問題は段々遠のいて行く感じがします。

日本政府は、島民は家族のお墓をそのまま放置して引き揚げて来ているので、墓参の機会を作ってくれており、私も3歳で弟が亡くなっているので平成4年から5回ほどお参りに行っております。最初に行きました時、墓石が一つも無くて探すのが大変でした。ロシア人のお墓は木の十字架なので墓石は珍しいらしく、パン焼き釜に使用したり土台に使用したそうです。

国で慰霊祭をして頂き、今はただ一軒も無い村落を眺め、墓地の前を通った時は小さな小さな子犬が一匹キャンキャン鳴きながらバスを追いかけて来ました。私一人が見たのでしたら幻と思うのですが、その時は同行した妹も見ており、弟と一緒に帰りたかったのだろうと、涙が出て仕方なかったです。

政府は、現在北方領土に住んでいる島民との交流によって、少しでも返還の一運となる

よう北方四島交流や自由訪問など、交流を行ってくれています。元島民が中心となって千島連盟を作り、何とか島を取り戻そうと取り組んで来ましたが、戦後67年も過ぎ当時の北方領土からの引き揚げ者も約1万人の方が亡くなり、残された人達も平均年齢が79歳と高齢になりました。

これからの返還要求運動を考える時、二世、三世の皆さんに託して行くより他に無いので

す。そして皆さんには、関心を持って頂く事なのです。そして返還要求運動をしているのを見た時、進んで協力して頂きたいのです。皆さんと力を合わせて、粘り強く推し進めて行きたいと思います。

私も残り少ない人生ですが、北方領土が還って来るまで、命を掛けて頑張りたいと思います。皆さん、宜しくお願いします。



元島民二世の訴え



志発島元島民二世 宮 脇 田鶴子 さん

こんにちは、私、北海道の中標津町から参りました。北海道が道東、北方領土に隣接している根室管内と云う地域で、1市4町からなっていて、その中心部分に中標津町があります。今年の夏は皆さん毎日暑くて大変だったと思いますが、中標津は雨ばかりで8月の晴天の日は4日しかありませんでした。でもいつもは涼しくて避暑には良いところだと思いますので、どうぞおいでください。

私は、父、母が歯舞群島の中の志発島で終戦を迎えていますので、私は志発島出身となっています。

北方四島というのはご存じのように、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島のことで、その歯舞群島は比較的大きい5つの島と小さい島々からなっています。その中で一番大きい島が志発島で60m²あります。

父母共に島で生まれ育ってはいませんが、教員として志発島で終戦を迎えましたので、その時島におりました父、母、姉までが元島民となっています。

母は、結婚してから志発島に行きましたのでそこだけですが、父は昭和4年教員となり根室管内に赴任し、昭和6年国後島の国後尋常高等小学校に昭和10年まで勤務しました。そこでの生活がとても良かったようです。当時は島流しと云う感覚があったようですが、父はそう取らず、「自分にとっては桃源郷の世界であった」といっています。そして昭和12年今度は択捉島の紗那尋常高等小学校に赴任します。ただ事件があり、13年までの1年

しか居れませんでした。

昭和13年母と結婚し、根室管内を勤務していますが、島での生活が忘れがたく希望しました。今度は志発島の西前国民学校に昭和17年から勤務となりそこで終戦を迎えることになりました。そこでの生活も、また父にとってはやりがいのある充実したものだったようです。

産業は他の島同様、鮭、昆布、ホタテ、カニ、エビ等の水産資源です。お魚は買うのではなくもらっていたようですし、食費として掛かるのは米、砂糖、醤油のような物だけだったようです。

父は、昭和51年に亡くなっております。私もまだ20代、島はどんな所だったと詳しく聞いたことはありませんが、そのとき島の元教育関係者でその当時の島での生活や教育を書き残そうとしていて、その原稿書きをしていた時だと思うのですが、早く島が返ってこないか。返ってきたらもう一度島に行って教育をしたい、という事は聞いておりました。

そのせいかどうか今ではわからないのですが、昭和58年中標津支部が出来、その設立総会に母が行かないで私が行っているのです。それが私の返還運動に携わるようになった原点です。

母にも思いはあったはずですが、母が行かないということでもそんなに思い入れはないのだと思い、私が行かなければなくなったようです。

私のすぐ姉が20年の春に生まれ、8月に兄

は姉の風邪が移り亡くなりました。墓があるそうです。島での話を母から聞いた記憶はありません。墓参にも行ってないと思っていました。でも少し前に姉から「行っているはずだよ」と聞かされ、そうか私が関心を持たなかっただけなのだと思います。

こうして語り部をやるようになり、もっと島の事を聞いておけばよかったと思っています。

あの頃の父は「明日にでも帰ってきたら」と云う言い方でした。こんなにも帰って来ないとは思ってなかったと思います。そう思いながら元島民の方々が亡くなっているのです。この思いを繋いで行くのが私たち後継者だと平成16年千島連盟の根室管内各支部の後継者が集まり「根室管内青年部連絡協議会」略して青連協とっていますが、を立ち上げました。そうして後継者としての活動を全国各支部の活動に広がるよう頑張っています。

千島連盟の返還活動の中に署名活動があります。中標津支部でも夏祭りと冬まつりに署名活動をしています。元島民の高齢化で参加者が少なくなったことで、私たち後継者も署名活動に参加することになったのですが、署名をお願いすると中に「あんた達の利益のためになんで署名なんてしなければならないの」「島なんてもう帰って来ないよ無駄だよ」等といろいろいわれ、勉強不足の私には返す言葉もなく、私には返してもらおう財産や利益なんてないんだけどな～と思ったりもしました。

その後、いろいろ勉強していくうちにこれって元島民の故郷のことではあるが、日本の領土の事ではないのか、国民の問題ではないのか、と思うようになり、その事を以前の私がそうだったように、皆認識していないのだ。これは国民のことなのだと認識してもらわなければならないのだ。と思うようになりました。

平成16年それ以前にも形だけの男性だけの青年部は在りましたが、正式に後継者として

の青年部を設立してから、夏祭りの署名活動の折、まず地域の人々に理解してもらう方法として、北方四島の地名のカードを作成し北方四島ビンゴ大会を行い、楽しみながら北方領土返還運動という言葉をも特別なものでなく身近なもの、と思ってもらえるよう行っておりますし、北方領土寄席として、志発島出身の後継者で落語家の三遊亭金八さんに来ていただき落語会をおこなっています。落語の始まる前20分ほどですが後継者の語り部を行って自分たちの勉強の場にもしております。

その他にも、青連協とって洋上セミナー、これは青少年・若い人、子供の参加を中心にしている、船に乗り、北方四島との間に中間線が引かれておりますが、その中間点近くまで行き、国後島をより身近に感じてもらうという企画です。

8月末には「北方領土返還要求北海道・東北国民大会」がありますがそこにぶつけてキャラバン隊を編成し、各地で署名をもらいながら道内を何年間かけて回り、今度は東北を回ろうということで昨年青森を回りました。

後継者と云っても二世は、戦後60年ですから60歳を超えている者もおります。次の世代に繋いで行くことも考えなければなりません。閉塞感が漂っていた返還運動でしたが、安倍政権になって動きがあります。この時期を逃したら、という感があります。

北方領土は元島民だけの問題ではなく、日本の領土の問題なのだ・国民全員の問題なのだという認識を持っていただき、皆様方には国に、肝を据えて返還交渉をしなければ、と思うように返還要求の声を大きくしていただきたくご理解とご協力をお願いいたします。

元島民とその後継者は自分たちの故郷を返還されるまで、この思いを伝えていきます。ご静聴ありがとうございます。



【福島県会場】

- 開催日時 平成25年11月18日(月) 10時00分～12時00分
- 開催場所 會津稽古堂
- 開催団体 会津若松市婦人団体連絡協議会
- 参加者 50名

元島民の訴え



択捉島元島民 佐藤 徳一 さん

皆さん、本日はお忙しい中、お集まりいただき有り難うございます。ご紹介をいただきました佐藤です。

私は、昭和14年に択捉島で生まれました。祖父が明治4年頃に入植し、ソ連軍の侵略で昭和22年に強制引き揚げになるまで、約76年生活しました。引き揚げ当時、私は7歳になっておりました。

昭和22年7月末頃に、択捉島から樺太に連行され約1ヶ月抑留されて、その後函館港に到着し28日間の船上生活の後、上陸しました。疎開後は青森、日高の門別町を経て、現在北見市に住んでおります。

北方領土とは、根室市側から、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島の事です。安政元年、1855年2月7日に日魯通好条約が伊豆の下田で結ばれ、国境を択捉島とウルップ島の間ラインに置くことと定められました。日魯通好条約が結ばれて、北方領土は一度も外国籍になっていません。我が国では、この様な経緯を踏まえ、2月7日を「北方領土の日」と制定しております。

戦前の生活状況についてお話しします。島の

主な産業は、7割が水産業、加工業、林産業の関係です。水産業は、漁業、孵化場、海藻業など、加工業はサケ、マス、タラバガニなどの缶詰工場、林産業は、林業、木材業、木工場などです。

公共施設としては、役場、郵便局、警察、学校、病院、神社仏閣などがありました。公務関係者は3割位でした。

一般の人の生活状況は、住宅は木造住宅が大部分で薪ストーブを使っておりました。照明は、ランプ、カンテラ。街路灯はありません。一部、特殊な所には発電機がありました。戦時中は、各家庭に灯火管制が布かれました。灯火管制、ご存じですか。漁業用の舟は櫓舟、はしけ舟、焼き玉船が使われていました。動力は、馬が最大の動力源で、大部分の交通や作業に使われていました。作業用具としては、馬そり、そり、もっこ、各種の鋸、ガンタ、トンビなどです。物資の輸送は、海上輸送で海運丸という船が使われておりました。大部分は函館、根室方面から来ました。米、穀物、雑貨類、調味料、酒類、駄菓子など様々なものを運んできました。輸送ルートは国後の各

所と択捉の西側に向かうオホーツクルートと歯舞群島と色丹、択捉の東側に向かう太平洋ルートとの二つがありました。

我が家の家族は、父母、姉3人、自分、弟の7人と道産子という馬が5～6頭でした。住まいの形状は横長で、玄関から中央が土間そこに小川を引き、右を馬小屋、左側を母屋としていました。その他、貯蔵室、精米用の水車小屋、馬の放牧場がありました。交通の手段は、夏場は主に徒歩や馬に乗り、冬場は馬そり、スキー、カンジキでした。食料は、米、畑作で自家製の野菜、ジャガイモ、大根、人参、かぶなど。魚介類は前浜で捕り、山菜は、露、ぎょうじゃんにんにく、茸などです。保存食として、マスの筋子を樽に塩漬けにし、身は燻製にしました。

その他、自家製で豆腐や納豆、どぶろくを造っていました。引き綱でマスが大量に捕れた時には、集落の人達皆で分け合いました。飲料水は井戸水や湧き水を使い、作業用には小川を利用しました。学校、神社、駅通がありましたが、近所に商店がなく、お金を使えないので買い物をするのを知りませんでした。また、具谷には病院が無いため、病人が出たら船で天寧か入里節方面まで行かなければなりませんでした。

ソ連軍の侵略についてお話しします。昭和16年4月13日に日本とソ連邦の間で中立条約が締結されました。内容は、「両国間の平和・友好、保全と不可侵を維持し関係を尊重する。此の条約は5年ごとに更新する。」というもので、昭和21年4月30日まで有効でした。昭和20年8月9日に、ソ連軍は条約を破って日本に参戦しました。昭和20年8月14日に日本はポツダム宣言を受諾し、8月15日第二次世界大戦が終結しましたが、終戦後の8月28日から9月5日にかけて北方四島は、無抵抗でソ連軍に占拠されたんです。

8月28日、択捉島留別に上陸。9月1日国後島、色丹島に上陸。9月4日歯舞群島に上陸。ソ連兵による北方四島住民の死傷者は、

死者10名、負傷者2名、その他暴行3件となっています。これは、ソ連側の発表ですので氷山の一角に過ぎません。

ソ連兵は我が家にも、不法侵入しました。終戦後の静かな部落に、突然ソ連軍が現れたのです。昭和20年8月末頃でしたか、ソ連兵が自動小銃を向けながら昼食中の我が家に土足で踏み込んできました。私は、初めて見る外国人なので日本人より体の大きさにただ唾然とし、驚異と恐怖心で一時はどうなるかと不安で声も出ませんでした。ソ連の将校が、兵隊たちは10名程でしたが、食事の場所を借りたいと、全員靴は脱がず土足のままで食事をし、終了後撤退しました。その間、姉達二人は室（ムロ）に隠れ、三女は病で寝ており、父母、私、弟が昼食中の時であったため、大事なく過ぎました。私は当時6歳でしたので、自動車、装甲車を初めて見て唸りながら地上を走るのに驚きました。

ソ連兵が移動中常用する食べ物として、人参をさいの目に切り乾燥させたものと、卵黄を乾燥し粉末にしたものを袋に入れて持ち歩き、歩きながら又戦場で食べるとのことです。占拠中、一般兵は黒パン、将校クラスは白パンでどちらも酸味があります。それを2～3切れとジャガイモの薄切りをバターで炒め、おかずにします。最後に角砂糖かミルクをお湯に溶かし飲むのが習慣です。その後、靴も全員が脱ぐようになりました。

私は、ソ連兵達が立ち寄って食事をしているのが楽しみでした。それは、彼らが食事後に飲む砂糖湯かミルク湯が飲めるからです。パンを持たないとき、米をくれと言われ渡すと、バターを入れピラフにして食べる。その時も食事後はミルクか砂糖湯を飲みました。手持ちがない時は白湯を飲んでいる。ソ連兵は10名位が、適当な期間で交代しながら駐留していました。彼らと私達家族の間では、いざこざがなく2年近く過ごしました。彼らは、時計、蓄音機などを欲しがり、壊れた時計でも喜んで持って行く。そして角砂糖と交換し

てくれました。

昭和22年、引き揚げの年に私の姉、三女と弟、次男の二人が亡くなりました。姉は、永年腎臓病を患っての、弟はジフテリアを患っての死亡でした。二人とも、終戦直後で医師がおらず、治療薬もなく、満足な医療を受けることなくこの世を去りました。現在も、私の戦後は終わっておりません。祖父、祖母、姉、弟の4名は現在も択捉島具谷の地に眠っています。

強制引揚げの命令は、昭和22年8月末頃、早朝に将校が来て本日の午後2時頃にトラックが来るので、引越の荷造りをしておくよう通達されました。トラックが来たが、すでに人と荷物で山になっている。皆、荷物にしがみ付き内保港に向かいソ連船が来るまで浜辺で待ちました。

ソ連の貨物船に乗せられ、樺太に行くことを知らされ、生命の不安を感じました。貨物船も、引揚者とその荷物で一杯の状態、全員疲れと不安な様子でした。彼らの食料なのか、船内をブタが3～4頭歩き回っていました。ロシア紙幣を持っていましたが、日本では使用できないと騙されて没収され、荷物も盗まれてしまいました。真岡の収容所に約一ヶ月程置かれ、毎日が不安でした。治安が悪く、照明も良くない。トイレの設備も屋外にあるため悪い。トイレは地面に穴を掘り、木材を二本渡し、簡単に囲っただけのもの。夜間は照明が暗く、トイレに行くのが命がけです。そのような中、日本船で函館に行くとの話を聞き、皆、安堵と歓喜に沸きました。

日本から、青函連絡船徳寿丸が真岡港に接岸し、これで生命の安全を確信し安心しました。いざ乗船となり、船内に入ると皆一斉に歓喜し、函館へと向かいました。函館港に着き、上陸と思いきや函館市内で赤痢が流行しているため、上陸は延期され、別の船で28日間船内生活となりました。

昭和22年10月下旬頃、函館に上陸し入国手続きに手間取っている内にも荷物が盗まれてしまいました。入国手続き後、私達は親戚を

頼り青森に渡り生活を始めました。11月に弟が誕生しましたが母乳がなく、牛乳、ミルクも買えず、母と姉が米を擦りオモユを与えていました。私も、青森市の油川小学校へ編入し通学することができました。その時の弁当は、いつも細いサツマイモが二本でしたが、食べられただけ幸せでした。私達は、昭和23年3月までそこで暮らしました。

昭和23年4月に北海道、日高の門別で第二の故郷として生活が始まりました。住まいは、鶏小屋の一部を借り改造して暮らしました。引き揚げ後は、手元にはお金も仕事も物も住まいもなく、生活に追われてきました。現在は、北海道北見市に住み、千島連盟オホーツク支部に所属し北方領土返還要求運動を行っています。北方領土が未だ未解決で、今年で68年になります。戦争に負け、取られたのだから当然と思われ言われてきたが、実は違ったことも知り、ソ連のプロパガンダでありロシアの実効支配であったことがNHKテレビで分かりました。各国と仲良く友好を持つことは大切ですが、自国の領土、領海は主張すべきだし自分達も知るべきと私は思います。

ある大学の講義でテレビ放映されていましたが、教授が韓国の留学生に竹島の領土問題について聞いていました。学生曰く、韓国では竹島のことは小学校から韓国の領土と教えられているため、当然韓国領土であると主張していました。

戦後、68年間もロシア（ソ連）の実効支配を黙認してきた日本国、政治家達、特に外交が外国各国に対し、自己主張をされていない状態といえます。最近では、韓国と「竹島問題」、中国と「尖閣諸島問題」などがニュースで報じられています。戦後の日本は、領土、領海に対し、敗戦意識と無関心が過剰ではないのか。そのため、相手に対し強い態度ができないでいる。今の状態でいたら、根室海峡中間ラインにロシアの軍艦が配置されることになるのではないかと考えられます。

当然、この領土問題は学校教育、小学校、

中学校、高校で行うべきと思います。そのためにも、各関係者、国民、政治家、学者、知識者、教育者が真剣に行動していただきたいと希望します。





志発島元島民二世 **神 林 美 砂** さん

おはようございます。只今ご紹介いただきました神林美砂と申します。

皆様には、本日お集まり頂きましたことにお礼を申し上げますとともに、北方領土返還要求運動にご理解とご尽力いただいていることに敬意を表します。

本日、ここ会津でお話しする機会を頂きましたので、はじめに少しでも関連のあるお話しをしたいと思えます。

会津の印象は、山々に囲まれた自然豊かな歴史の町。猪苗代湖は、磐梯山が噴火して水が堰き止められて出来た湖で、周りには温泉も多くあると思えます。

国後島、択捉島は火山が連なっていて活火山も多く、温泉も昔からたくさんあります。戦前国後島では、吹き出る硫黄を木材にいぶして腐食を防ぐ加工をして荷出ししていたそうです。温泉は今も変わらず湧き出ている川の水で温度調節するような自然そのままのものもありますが、近年では施設が整備され、島に住んでいるロシア人も温泉を楽しんでいます。

また、エネルギーとしても活用していて、国後島、択捉島では火山の地熱を利用して電力を賄っています。

もう一つ、先程教育長もご挨拶で会津と北方地域は縁があるとお話しされていましたがその話に少しでも触れさせてください。

根室と知床・羅臼の間に標津町という町があります。標津町は、国後島ケラムイ岬から16キロの所にあり、鮭がたくさん獲れる漁業

の町です。

鎖国を解いた江戸幕府が、沿岸の警備や開拓のため分割統治を始め、会津藩がここを任されました。漁場の取り決め、町割りの基礎。標津という文字はアイヌ語を漢字表記にしたのが会津藩領の時だそうです。昨晚、会津の郷土料理をいただきましたが、この山に囲まれた地で、鯨の山椒漬け、棒鱈の煮付けというのは、当時北前船で運ばれてきたのが始まりだそうです。

私は、根室で生まれ根室で育ちました。母は歯舞群島志発島の出身です。子供の頃、納沙布岬から見えるあの島々には、大きくて怖いロシア人が住んでいると思っていました。根室では小学校の高学年になると社会の時間に「北方領土」の授業があり地理的なこと、歴史、戦前の暮らしなどを学びます。

私が、返還運動に関わってから20年以上経ちました。その間、様々な機会を与えられましたので、本日は私が見聞きしてきたことをお話ししてまいります。

初めに北方四島の概要についてお話します。国後島は沖縄本島より少し大きく、択捉島はその約2倍、この二島で四島の93%の面積を占めています。この二島は山々が連なり、多くの川が流れ雄大な大自然の島です。

国後島の爺爺岳は、四島最高峰の美しい山です。島の北東・択捉島側にあります。先ほども火山のお話しをしましたが、私が小学6年生の時に大噴火し、根室にも真っ黒な火山灰を降らせて傘をさして学校に行きました。

さきほどお話しにもありましたが、択捉島の太平洋側には真珠湾攻撃に向かう連合艦隊が終結した単冠湾、そしてオホーツク海側には昭和20年8月28日、ソ連軍が四島で一番初めに上陸してきた留別があります。

色丹島は、なだらかな丘が続く緑の美しい島。アナマ湾は深く切れ込んだ良港で、昔も今も嵐の時の船の避難港です。歯舞群島は起伏が少なく、私たちはせんべい島なんて言っていますが主な五島、水晶・秋勇留・勇留・志発・多楽島の周辺には、海鳥や海獣類の多く生息する大小様々な岩礁があります。戦前四島には17,291人が住んでました。漁期には、多くの出稼ぎの人もいたそうです。島民は海からの豊かな恩恵を受け、暮らしていました。

当時は冷凍技術がありませんから、獲れた魚介類・海藻類は塩蔵や乾燥、また缶詰に加工していました。みなさんおなじみの昆布はとても良質なものでした。今もですよ。志発島では、昆布と並んで乾燥帆立貝柱もたくさん作っていました。学校帰りに、干してある貝柱をポケットいっぱい詰めて、食べながら帰ったそうです。ここに志発島から私が持ち帰った貝殻があります。すごく膨らんだ貝殻です。そうです、貝柱がとても大きかったのです。

昭和の初め、択捉島・紗那では豊漁が続き、景気が良く畳の下にお札が敷いてあったという話も聞きましたし、三越の通販で買い物をしていました。噴水のある家もあり、テニスコートもありました。また、カニ缶の酸化防止の白い紙は、国後島の缶詰工場が始まりと言われてます。

歯舞群島と国後島は、主に根室の経済圏で、物資は根室から入っていたそうです。択捉島には、函館からの船が入っていました。先ほどお話しした単冠湾は、冬でも結氷しなかつたので1年中物資や郵便が途絶えなかつたそうです。

豊かなのは水産資源だけではありません。先ほどの温泉の話もそうですが雄大な自然で

す。解りやすくいうと、知床が何十もある感じ。山・川・森・高山植物・滝・湖・湿原・温泉、そこにはクマ・海鳥・シヤチ・鯨・ラッコなどの生き物が生息しています。現在もロシア人居住地区を除き、ほとんどが手付かずの大自然です。近年では、ロシアの国家予算などが付き、開発や整備が急ピッチで進んでいます。また、資源の乱獲でこれらは壊されつつあります。こういった環境面からも、返還を急がなければならないのです。

私は、ビザなし交流の始まった年に島に行く機会を得ました。先ほどお話ししたような子供の頃のイメージを持ったまま参加しました。とにかく行って見てみよう。と思ったのです。

初めて見た国後島・古釜布。霧の中、湾にはたくさんの沈船が放置され、見える建物は潮風にさらされた古い建物ばかり。廃墟のように見えるこの島をなぜロシアは返さないのか。これが「知床旅情」で歌われている「遙かなしり」なのか…。錆色の景色を見て一番初めに感じたことです。択捉も色丹も同じように錆色でした。

しかし天気が良くなると、青い空、あふれる緑…すばらしい自然が目にとび込んできました。ロシア人も明るく、子供のころから持っていたイメージを捨てるのにはそれほど時間はかかりませんでした。

この初めての訪問で、私は択捉島出身のおじいさんに出会いました。私たちは運悪く嵐に合い、択捉島のオホーツク海側で丸一日停泊することになりました。そこはおじいさんの故郷の村の沖合でした。嵐に遭わなければ、目にすることもなく、夜中に航行するはずの場所でした。

大きく揺れる船で、鳥のことをたくさん話してくれました。そしてずっと島を、故郷を見ていました。色々思い出していたのでしよう。

天候が回復し、夜中に船は碇をあげました。その際、漁師だったおじいさんが「あの山の

雲が取れば風向きが変わる。そうしたらGOだ。」と船長さんにアドバイスしたそうです。おじいさんは、真っ暗で揺れるデッキに出て、島に眠る家族に「般若心経」を唱えたと翌朝聞きました。

私はおじいさんに言われました。「ねねこ～（おねえちゃん）、オレはもう来られない。後は頼むぞ。」「そんなことないよ、また来られるから。」と返しましたが、胸が一杯になりました。鮭は生まれた川に戻ってきます。「鮭になってでも帰りたい。」と、言っていました。が叶うことなく亡くなりました。

私は、2007年に家族で初めて志発島の元居住地に行きました。同じ地区に住んでいた人たちが「ここ、あんたのトコ。」と教えていただいたり、初対面の方から亡くなった叔父や叔母の話の聞きました。

先ほどホタテの貝殻をお見せしましたが、他にもあります。生活していた証しのお茶碗のカケラ、これは石炭。石炭は海底に鉱脈があって、波で削られて打ちあげられているらしいのですが、戦前も集めて燃料にしていたそうです。石炭拾いは子供の仕事で、その頃に戻ったようにみなさん集めていました。それと「多楽石」と元島民が呼ぶ石、メノウの一種だと思うのですが…。これは本当に波打ち際でひととき輝いて見えて、みんなでジャブジャブ水際を下ばかり見て必死に探しました。

占領された1945年9月には、母の家族は祖母の姉のところへ皆行って、島には誰もいませんでした。でも、祖父の大きい船が沖留めされていて、ソ連兵が島の反対側に行っている間にその船で女・子供だけでも根室に逃がそうということになり、地区の人たちが乗りきれないほど集まったので更に小船を引き、船は根室に向かったそうです。占領後、初めての多勢の引き揚げということで、島の様子を知りたい役所や多くのマスコミが船を迎えたそうです。

その船に乗っていた一家の末の妹さんが私

に言いました。「私は島を出てから生まれたのだけれども、あなたのおじいさんの船に家族が乗らなかったら、私は今ここにいなかったかもしれないのよ。」と。

2011年6月、再び志発島に行ってきました。元居住地の再確認と、出来るだけ一世の方のお話を現地で聞こうと思っていました。

3月の地震の津波で砂浜にはちぎられた海藻が高く積もり、浜辺に壁が出来たようになってずいぶん様子が変わっていました。前回確認したはずの家の場所も、この辺り…というのはわかったのですが、頼りだった近所の姉妹（お二人とも80歳を超えています）が体調を崩し参加出来なくなったこともあり、ちゃんとした再確認が出来ずに戻ってきました。

こんな状況だったのは私だけではなかったので、一緒に参加した同じ世代の人と、お互いの家の場所をみんなで確認しましたが、元島民の平均年齢は70代後半。高齢化が進み、記憶の引き継ぎが難しくなっていることを実感しました。

志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯し、エビの漁期にだけ来るロシア人がいるだけです。ビザなし交流に参加した時も同様ですが、元島民の方々はただただ島を見ています。私たちには見えない昔の景色や、家族を見ているのです。その想いが伝わるほど切なくなります。私はできる限り現地で元島民のお話を聞くようにしています。島への想いをより強く感じるからです。

皆さんもそうだと思うのですが、故郷というのは年を取れば取るほど懐かしく、恋しくなるもの、ですよ。年を取って自分の生きてきた月日を振り返ったり、懐かしんだりすると必ず故郷を思い出します。自分たちの意志ではなく出てきて、自由に行けないとなれば尚更です。

島からの引き揚げ方は様々です。歯舞群島の島々や、国後島の北海道に近い地域などからは、嵐の夜やソ連軍の見張りが手薄になった時などに、根室目指して小舟で逃げてきた

人も少なくありません。命を失った人もいます。

若い女性はソ連兵に見つかったら乱暴されるかもしれない。と、服の襟に毒を練り込んだ団子を忍ばせていたそうです。また送りこまれてきたソ連人と共に暮らし、寒い時期に劣悪の環境の引揚げ船で樺太経由で函館に送られた人。なかには村を出て、函館に着くまで3ヶ月かかった人。

家の子供が皆小柄なのは、引き揚げ時とその後の栄養が足りなかった。病気になったり、定住地がなかなか決まらず引き揚げ後も大変苦労されたそうです。先日お会いした択捉島出身の女性は、終戦・占領時は女学生で親元を離れ函館で過ごしていたそうです。女学生と言っても中学生です。島の情報は何もなくて自分は一人ぼっちになったんだ。と淋しく、不安な日々を過ごしたそうです。

東日本大震災の後、岩手県に住む国後島出身の方にお見舞いのハガキを書きました。その方は、内陸にお住まいなので大きな被害には遭われていませんでしたが、後でお手紙をいただきましたのでその一節をご紹介します。

「特に、福島原発周辺の被災者の避難所生活を思う時、住み慣れた国後島を追われ、

樺太の真岡の収容所で家族8人と共に過ごした日々を思い出します。」というお手紙です。

自らの意志ではなく故郷を離れ、先がどうなるのか判らないということが引揚げの時の自分たちとダブったのでしょうか。同じようなことを他の元島民の方もおっしゃっていました。

島を返せと言うが、日本人は今更この便利とは言えない島に住めるのか？と聞くロシア人もいます。そういう理屈ではないのです。故郷だから帰りたい。ただそれだけで当たり前のことなのです。会津弁ですと「なあぬものはならぬ」です。

私たち2世や3世は「後継者」と呼ばれています。文字では「後を継ぐ者」と書きますが、元島民の後継者として何を継ぐのか？と考えます。68年進展のないことを後を継ぐ。とても重いものです。

北方領土は4つの島で「北方領土」であるということ、今日お話をさせていただいた「島への想い」をしっかりと継ぎ返還運動をしていくこと、それが後継者の役目です。それぞれの元島民が抱いている「島への想い」を聞き伝え感じ、一日も早い解決を目指し力に行きたいと考えています。

本日は本当にありがとうございました。



平成25年度
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて
第24回「元島民の北方領土を語る会」集録

発行／平成26年3月

編集／監 北方領土復帰期成同盟

〒060-0031

札幌市中央区北1条東1丁目

明治安田生命札幌北1条東ビル

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

e-mail：hoppou-d@isis.ocn.ne.jp

写真提供 監 千島齒舞諸島居住者連盟

印刷／株式会社 正文舎
